

日高学長と東国原宮崎県知事 OB特別対談 宮崎日日新聞に掲載

11月16日に宮崎市内で行われた日高義博学長と東国原英夫宮崎県知事(昭55経済)の特別対談が12月9日付・宮崎日日新聞に掲載された(対談の内容は本紙1月号に掲載します)。



教育学会第55回大会

卒業生3人が報告

教育界で活躍する卒業生らが研究報告と情報交換を行う専修大学教育学会(日高義博会長)第55回大会が11月23日、生田キャンパスで開かれた=写真。

研究会では木村瑠美子横浜市立鴨居中学校教諭(平12文)が「6年間の教師生活で学んだこと」、長船孝明東京都立大田地区進学型専門高等学校(仮称・開設準備室)校長(昭53商)が「進む都立高校改革=新しいタイプの都立高等学校=」、加瀬きよ子・同主幹(昭62商)が「大田地区進学型専門高校=新設校への希望と思いそして苦しみ=」と題して発表を行った。

本学学生相談室カウンセラーの森美保子さんの「学校現場における信頼関係とネットワークの構築」の講演の後、定期総会、情報交換会と懇親会が行われた。



第2回ワイン大学

ドイツ大使館広報部長らがワイン談義

校友会ワイン大学が11月16日、神田キャンパスで行われ、校友、育友会員、在学生ら約120人が参加した。

2回目の今年は、ドイツワインにスポットをあて、ドイツ大使館広報部長・一等書記官のクラウス・フィーツェ氏と、ドイツに留学経験のある西島(株)代表取締役の西島篤師氏(昭49経済)、(有)シン・トレーディング代表取締役の江畑進一氏が、ワインの楽しみ方や、フランスワインとの違いなどを話した。参加者たちは講演に耳を傾けながら、講師おすすめの“1本”を楽しんだ。

初のプチ講演会

11月21日には校友会プチ講演会が、神田キャンパスで開かれ、校友ら約80人が参加した＝写真。

日高義博理事長・学長のあいさつの後、クラウス・フィーツェ氏がチェルノブイリ原発事故をきっかけに、整備されたドイツの環境政策を紹介。日本の取り組み方との違いを語った。引き続き、西島篤師氏が講演。「ベテランは高い技術力を持った創業者精神の体現者である」とし、定年制度がない自社の経営理念を話した。



▲C・フィーツェ氏



▲西島篤師氏



「緑鳳学会」第16回大会

11月3日、神田キャンパスで専修大学緑鳳学会(矢邊學会長＝国士舘大学名誉教授)の第16回大会が開かれ会員ら40人が出席した。

池本卯典日本獣医生命科学大学長(昭29法)＝写真＝が「日本における法医学の今昔そのパラダイム」を発表したほか、会員3人が研究発表を行った。引き続き総会と懇親会が開かれた。



秋の叙勲受章者

◇瑞宝小綬章

牛越 隆晴氏(うしごえ・たかはる=昭39法)

◇瑞宝単光章

内田 亨氏(うちだ・とおる=昭32法)

《校友短信》

◆海老名市長

内野 優氏(うちの・まさる=昭53法)52歳。再選。11月11日投開票。

「第2回マニフェスト大賞」

渋谷区・長谷部さんに最優秀アイデア賞

全国の首長・地方議員の政策や提言を表彰する「第2回マニフェスト大賞」(ローカル・マニフェスト推進地方議員連盟など主催、毎日新聞社後援)が11月9日に発表され、渋谷区議の長谷部健さん(平8商)の環境キャンペーン「シブヤロハスプロジェクト」が、地方議会部門の最優秀アイデア賞に輝いた。このほか「シブヤミライプロジェクト」などで同部門の最優秀成果賞とグッドマニフェスト賞にもノミネートされた。

檜原和子さんの油絵展

画家の檜原和子さん(昭41法)が10回目となる油絵展を開催する。タイトルは「～風の旅VI～モスクワからブルターニュへ」。08年1月7日(月)～12日(土)中央区銀座の「地球堂ギャラリー」で。

≪校友の本 紹介≫

昭和の二刀流 ビルマに死す

南堀 英二 著

『テストパイロット』(ニュース専修442号に紹介文掲載)で文庫デビューを飾った南堀英二さん(昭和52経済)が『昭和の二刀流ビルマに死す』(光人社NF文庫、本体743円+税)を上梓した。

本書は昭和9年、宮城内で開催された天覧武道大会で準優勝を果たした逆二刀の剣士・藤本薫がビルマ戦線でその生涯を閉じるまでを描いた感動作。本学の石崎徹経営学部教授をはじめ、多くの方から実技指導や資料提供を受け、藤本の足跡に近代剣道の歩み、当時を知る人たちの談話を交えて記したノンフィクション作品である。



≪訃報≫

西川 善介氏(にしかわ・ぜんすけ)名誉教授、元文学部教授

11月3日、89歳で死去。告別式は近親者のみで執り行われた。

人文学科長などを歴任。1988年3月定年退職。

「専大校友を訪ねて」

「仕方がない」では始まらない

京都市議会唯一の無所属で奮闘する京都市議
村山祥栄(むらやま しょうえい)さん(平12法)



25歳になったばかりの2003年統一地方選では京都市政史上最年少で初当選。2期目の07年は、実績を認めてくれた市民の圧倒的な支持を受け、2位に約2800票差の左京区トップで再選を果たした。選挙費用はすべてカンパ。お金のかからないクリーンな選挙を実現し、現職唯一の無所属ながら、徹底した「現場主義」で市民生活向上に奮闘している。

「社会」に対して疑問を持つ小学生だった。次第に「政治」に興味を持つようになり、本学法学部に。現場を知るため、現・神奈川県知事の松沢成文氏(当時・衆院議員)の事務所に飛び込んだ。「見るものすべてを吸収したあのころが、『現場主義』の原点」と振り返る。

多くの選挙にかかわる中で、「熱い思いを持っているうちに出身地・京都市民の力になりたい」と25歳での京都市議当選を心に決めた。入社したリクルートでの「7期連続表彰」という実績を自信に24歳の秋、地元に戻る。組織も知名度もない中、駅前での演説、ビラ配りを続けるうち、学生を中心に支援者の輪が広がり、5004票を獲得。1期目は、新人の壁に苦しむが、会派ごとに質問時間を割り振る市議会本会議で昨年秋、無所属で初めて一般質問に立つ。臨時議会では、市役所職員の不祥事を追及し、波紋を広げ、「正論を吐き続ければ、社会が動く」ことを実感した。

「組織再生と財政再建」が政治テーマ。「地方が踏ん張らなければ、『期待感のある社会』の実現はできない」と走り回る。

キャッチフレーズ「仕方がないでは始まらない」が浸透し「子どもが『しゃーないの、おっちゃん』と声をかけてくれるようになりました」と笑顔を見せる一方で、疑惑には敢然と立ち向かう。タブー視されてきた同和問題に鋭くメスを入れた、12月下旬出版予定の『京都同和「裏」行政』(講談社+α新書)は、各方面で話題を呼ぶことだろう。